

女の子になったボクと
ボクの好きな人との初めての
メメメ

来宮 悠里
イラスト/tatapopo

R18

女の子になったボクと

ボクの好きな人との初めての
×××

わたし……榊燈佳は、一年前まで男の子だった。

入学式の数日前、居候先の女の子が行ったおまじないに巻き込まれて性別が男から女になってしまったのだ。

それから一年間女の子として過ごして、わたしは男の子ではなくて女の子としてこれからの人生を歩んでいくことを選んだ。

好きになった人が男の子で、その男の子とえっちなことをしたいと思ってしまったからだ。その男の子……瀬野瑞樹は、わたしが元々男の子である事を知っている。

一度元の姿に戻って、その男の子の姿のわたしにキスまでしてくれた事がある。

わたしも、ちゃんと女の子になって彼に報いたい、彼のことを好きでいて良いのかと聞いた。彼は照れくさそうに、俺も好きでいて良いかと聞き返してくれた。

これはボク……じゃなくて、わたしが瑞貴と初めてえっちなことをする話。

お互いが好きだと言いつつ、男の子と女の子の普通のカップルになって何回目かの週末の話だ。バレンタインの日にチョコを渡すのと合わせて告白をして、返事を貰って、それから放課後毎日のように手を繋いで帰る。

瑞貴が触れてくれるのがわたしの手だけで、それがとてももどかしいと思っていた。

その大きな手で体の隅々まで触って欲しいと思って、何度となく自分を慰めたものだ。

そんな事を思いながら、放課後の人通りの少ない廊下にて。

わたしは瑞貴と一緒に玄関まで歩いている。

スクールバッグはち切れんばかりにパンパンで、中身も相まって割とずっしりと重い。

「……今日泊まっていいよね」

明日は休み。

それに最近は瑞貴に夕御飯を作ってあげることも増えた。だから、明日が休みという週末は、一人暮ら

しの瑞貴のアパートに泊まりに押しかけてもいいのである。

わたしが決めた。決めたのは昨夜の話である。

「えっ……？」

どうして心外そうな顔をするのだろうか。

「ダメ……？」

「いや、ほら……マジで言ってる……？」

わたしが瑞貴の部屋に泊まる？ と、指でわたしと瑞貴を交互に行き来しながら困惑した表情を浮かべる瑞貴がとてもおかしい。

だって、わたしは今日のために勝負下着を穿いてきたし、ショーツが汚れないようにトイレの度におりものシートを取り替える徹底ぶりだ。

どっちが好みか分からないから替えももう一着持ってきてるし、今日のバッグの中は完全に瑞貴の部屋に泊まるつもりで装備しか入っていない！

だから、スクールバッグがはち切れんばかりにパンパンになっているのである。

何もかも、瑞貴が悪い。

ここに瑞貴が誘えばほしいほしいについていく、瑞貴にだけ尻の軽い彼女が居るのに、未だになんのお誘いもしてこない瑞貴が悪い。

ヘタレなのは知っている。けれど、どうして据え膳を食ってくれないんだと、割と周りに愚痴を零して慰められる日々である。

もう我慢の限界だった。だから、受けに回るのはやめて攻勢に出ることにしたのだ。

そもそも、わたしの性格上、受身はダメだって、我慢はできないタイプだって自分でも分かっていたじゃないか！

「わたしは大真面目ですよー。このバッグの中にはなんと！ お泊まりセットが入っています！」

「マジかよ……」

「うん、マジマジ。だから、今日は何が食べたい？」

まずは胃袋。既に掴んでいるけれども、作法に則って、まずは胃袋をせめる。それが大原則だ！

「え、いや、ええと……明日も続けて食べられるやつ、とか」

「それじゃ、シチューとビーフシチューとおでん。どれがいい！」

「最後のおでんはなんぞや……」

「作るの楽だから？」

楽ではないけれど、まあ前二つに比べたら格段に楽ではある。

仕込みだけしてお鍋にしてしまってもいいし。

「ふうむ……ちよっと待ってな」

そんなことを言いながら、瑞貴はポケットから財布を取り出して、中身を確認している。

別にボクも食べるから、お金のことは気にしなくていいのに。

「材料費、半分はわたしも出すよ？」

「いや、うちに土鍋がない」

「あー……、じゃあ普通にシチュー？」

「いや、まだ寒いし、おでんはちよっと食べたいなと思わなくも」

「なるほど……。それじゃあ、わたしも出す、よ！」

再度、わたしもお金を出すことをアピールしてみる。それでも瑞貴は随分と渋い顔をしている。

「だって、これからわたしも、一緒に食べる機会多くなると思うんだよね！」

「今日の燈佳はなんかぐいぐいくるなあ……」

「いつもより攻めっ気を出しております」

「なんでさ！」

正直、無理矢理テンション上げていかないと今日のこれからを乗り切れそうにないなんて思うからです。なんて口が裂けても言えない。

少しでも素面に戻ったら、自分のやろうとしている事に対して気恥ずかしさで死んでしまいそうになるのだ。

だから、瑞貴にはわたしのテンションの犠牲になって貰う！

か、彼氏なんだからそれくらいは許してくれるはず！　　というか、許してほしい……。

「別にいいじゃんーん」

「いいけどさ……」

「わーい。それじゃ、いこいこ」

瑞貴の手を引いて、玄關まで足早に向かう。

やりたいことの恥ずかしさに、頬が熱くなって、今は真っ赤だろうから、できれば顔は見られたくないのである。



それから、いつものように雑談をしながら、少しだけ遠くのショッピングセンターまで足を伸ばして、カセットコンロのガスボンベや土鍋、それにおでんの食材なんかを買い込む。

「あ、ちよつと買い忘れがあったから、ドラッグストアに行ってくるね」

正直言って、これを買うのはとても恥ずかしい。恥ずかしいからできれば一人で買いたい物だ。

使うかはさておき、やつぱりいざ恐くなったときのために、着けてつてお願いできるのは強みだ。平静を装って、瑞貴から離れてそそくさとショッピングモール内にあるドラッグストアに向かう。買い物籠を手に、旅行用のシャンプーとか、歯ブラシとか、必要な物を入れていく。

どうせ、店員には察されるのだから、恥は掻き捨てする事にしよう。

衛生用品のコーナーに向かつて、陳列されてる、コンドームを一箱手に取る。

値段を見てちよっとびつくりしたけれど、使う使わないはさておき、やっぱり恐くなったときにあるというのは安心だ。

バッグの中には以前、クリスマスの際に養護教諭から貰ったアフターピルもあるけれども。

それにもし、いざというときに濡れなかったらって事を考えたらローションも買っておいた方がいいだろうか……。

一人でするときには、シーツに染みを作るレベルではないけれど、雫が溢れる位には濡れるから、大丈夫だとは思いたい。

「一応買っておこうかな……」

買い物籠にローションもシュート！

籠の中身が明らかにこれからお泊まりでセックスしますよと言わんばかりのラインナップだ！ しかも今わたし制服だし！

ちよっと頭が冷えて冷静になったけれど、これ、大丈夫かな？ バックヤードに連れ込まれたりしない？ 不安になってきたんだけど。

今度は別の意味で心臓がドキドキと跳ね始める。

レジに並び、店員さんが死んだ目で、値段と点数を読み上げて行く。

明らかに「チッコのリア充共めが」と言わんばかりの目の死につぶりだ。

ごめんなさい、でもこれわたしの自己判断なんだ……。無理矢理買わされているプレイじゃないんだ……。だから、そういう視線はやめて欲しい。

見られて頬が熱くなりながら、会計を済ませる。

レジ後ろにあるカウンターに籠を持っていき、不透明なレジ袋に買った物を詰め込んで行く。

幸い、誰かに見られたという事は無かったのは安心できた。知り合いに見られたら、からかわれるだけじゃ済まないだろうし……。

ドラッグストアから出ると、瑞貴に連絡を取る。

電話のコール音が鳴り、通話に切り替わる。

そして、もしもしという声が聞こえてきた。

「いまだどこにいる？」

わざわざ電話じゃなくても良かったんだけど、なんでか電話で連絡を取りたいと思ってしまったのだ。こういうふとした拍子に声を聞きたくなるということとを相談したら、燈佳はもう完璧に女の子だねえ、なんてしみじみ言われてしまった。

どういう意味がよく分からなかったけれど、女の子ならよくわかることらしい。

『一階入り口の喫茶店にいるぞー。何か飲むなら頼んでおくけど？』

「あ、うん、暖かいカフェオレ飲みたい」

『あいよー、慌てて転んだりするなよ』

電話越しでも分かるクツクツとした笑い声を殺しながら瑞貴がそんなことを言う。

躓いたのとかって、ボクがまだこの体に慣れていない最初の方だけなのに、最初の方の失態をいつまでもいつまでもこうやってからかってくるんだから、全くもって度し難い……。

でも、まだ、女として生きるか、男として生きるかふわふわしていた時期のわたしの事をちくちくと思ひ出させてくれる。

でも、それは、とても嬉しいことで、女として生きると決めても、まだ男だった時の事が地続きで繋がっていることを証明してくれている。

だって、形式上、男の榊燈佳は死亡したことになっているから。

今のわたしは、榊燈佳ではなく、榊燈里という戸籍を持っている。

しかし、身近な人達はわたしの事を燈里ではなく燈佳と呼んでくれている、それがたまらなく嬉しくて、ボクがわたしになっても、ボクもわたしも合わせて、わたしと言ってくれている気がして。

だから、わたしも自由に、好きなように生きていける気がする。

「大丈夫、転びませんー」

『それならいいんだが』

心配してくれているのは分かっているから、わたしもくすりと小さく笑い声を上げて、
「すぐいくね。甘いカフェオレよろしく」

それに彼の『おう』という短い返事を聞いて通話を終える。急いで向かおう。

一階の喫茶店なら、走ればすぐについてしまうだろう。けれども、店内を全力疾走なんて奇行もいい所だし、ここは走り出したい気持ちを抑えて、ゆっくり歩いて行く。

最初はこのショッピングモールも人が多くて、一人では歩けなかったのに、今では随分と慣れて、ウィンドウショッピングを楽しめるくらいにまでなっていた。

女の子向けのブランドの春物の衣服を見ながら、カジュアル目なら、こういう服がいいんだろうななんて、考えながら喫茶店へと歩を進める。

角を曲がれば店先が見えてくるそのちよつと前で、鞆から手鏡を取り出して、自分の顔を確認する。うん、赤くもなっていないし、髪もどこも乱れていない。

何度も短くしようと思っただけで、それでも周りの人がこんなに綺麗な髪を切るなんて勿体ない！と口を揃えて言うから、毛先を整える程度しかしていない髪の毛。

二ヶ月に一回は下宿先の同居人に引っ張られて美容院に連れて行かれるのである。そして、一回の費用を見ると目玉が飛び出そうになる。最近は大分慣れてきたけれど……。

「よし……！」

手鏡を鞆の中に戻して、喫茶店へと向かう。

オープンスペースの分かりやすい所に、目立つ金髪があった。

「ごめん、お待たせ」

その金髪を目印に、わたしは謝りながら近づく。

「ん、いや気にしないでいいぞ、ほれ、丁度いいくらいに温くなってる」

「ありがと、お金お金」

「いいいいいよ。飯作って貰う代わりに奢るから」

そんな、いつもあるやりとり。

こういうとき瑞貴は頑なお金を受け取ってくれない。少額とはいえ奢って貰うのはあまり好きじゃないって言うてるんだけど、譲ってくれない。

燈佳も元々男なら俺の気持ち分かるだろ!?

なんてことを言ってくる。

うん、まあ、正直に言うと、よくわかる。

好きな子の前じゃあ格好つきたい。

でも、その思いって実は男だけじゃないんだよねって言っても理解して貰えなかった。

とても悲しい。

女の子だって好きな人の前じゃあ、格好いいと思われたいし、可愛いと思われたい、とてもめんどくさい生き物なんだ。

どっちの気持ちも理解できるが故に、わたしは、

「そう？　ありがと」

はにかんで、温くなったカフェオレを貰う。

猫舌なせいで余りに熱すぎたら舌を火傷してしまうから、わたしはあまり熱々な物は口にしないという

事をよく分かっている。

「所で、何買ったんだ？」

「え、それ聞くの」

「聞いたら不味い物なのか」

「普通、女子のドラッグストアでの買い物は詮索しない物だよ……？」

こうやって、たまに無神経な疑問を投げつけてくるのも、また、女のことを何も知らないんだなあって思われる。

わたしは、その無神経さとかそういうの、よくわかるから、咎める口調になりがちになるけれど、最終的には苦笑で済ませる。

「そ、そうなのか、なんかわりい……」

「この不透明袋で色々察して下さい。あの系列店、小物買うときは大体オレンジ色の袋でしょ？」

「あ、あ……オーケー、分かった。察した。俺が悪かった」

うんまあ、中に入ってるのコンドームとローションなんだけどね？

いい感じにナプキンと誤解してくれたようだ。ククク……。

「わたし以外の女性にそう言う事聞いちやダメだからね？」

「安心しろ、燈佳以外には聞きたくても聞けねえ」

「そ、そう？」

「なんで、赤くなる……」

いやだって、ねえ？

わたし以外のプライベートにはずけずけ踏み入ることはできませんって宣言してるような物だし。

その代わり、わたしのプライベートにはずけずけ踏み込みますって、それってわたしの事を知ろうと思つて、わたしに直接聞いてくるってことだし、そりゃあ、頬の一つも染めたくありませんよ。

すつごい嬉しいに決まってる。

「正直、照れる」

「なぜ!？」

「ひみつ」

なんだそりやという呆れ顔を尻目に、買って貰ったカフェオレを飲み干して、席を立つ。店内は随分と活気に溢れているが、オープンスペースから見える外はもう真っ暗だ。春も近いとは言え、まだまだコートが手放せない冬の寒さなのである。

「そろそろ行こっか」

「お、おう……てか、マジで泊まるの……？」

「もちのろん」

「まあ、俺はコタツで寝ればいいからいいけどさあ……、人の布団で寝るの嫌じゃね？」

ふむ……事ここにいたって、瑞貴はわたしを襲うという選択肢がないように思える。

そんなに大事にされているのは嬉しいけれど、わたしがここまで食べていいですよってお膳立てしておいて知らぬ存ぜぬを貫くとは、これが世に言う草食系男子なのかと思ってしまう。

いいじゃん、食べてよ。別にお外でもわたしは一向に構わないんだよ。

「逆に聞きます、瑞貴はわたしの布団で寝たいと思わない？」

「え、いや、それはほら……」

「お、も、わ、な、い？」

「ええ、はい……そうですね……」

「でしよー、そういうことです」

「ドウイウコトデスカ」

わからないかなあ。好きな人の匂いは嗅いでいたい物なんですよ。

好きな人の品物に囲まれているとそれだけで、安らぐし、幸せな気持ちになれる。一番いいのは体同士で触れ合うことなんだけれども。

「わたしは気にしないってことです」

「そうですか……」

そうなのです。



ショッピングモールを後にして、瑞貴の住むアパートに行き、ご飯を作った。

といつても、食材を切って、ちょっとした下準備をして、出汁を取ったおでん汁に具材を入れただけだ

けど。
相変わらず、本とかその他諸々が散乱している瑞貴の部屋だったけれど、わたしが料理を作っている間に最低限片付けさせた。

「おお、美味そうだ」

こたつの上にカセットコンロを置いて、その上におでんの土鍋を乗せて着火。

弱火でぐつぐつことと煮込む。

「一応ご飯も炊いたけど、食べる？」

「食べる食べる！」

「分かった。それより、また夕飯コンビニ弁当ばっかり食べてたでしょ」

勝手知ったるとはまさにこのこと。ちなみに、瑞貴の部屋の台所を主に使うのはわたしだ。だいたい自治体指定のゴミ袋の中にはカップ麺とかコンビニ弁当の容器が入っている。

少しくらい自炊したらいいのに、面倒らしい。

茶碗によそって配膳を済ませる。

「ダメだよ、ちゃんと自炊しなきゃ。カレーとか鍋物作ってれば何日分かになるんだから」
もー、と軽く怒りを露わにする。

食事は生きる上で大切なのだ。美味しいご飯はそれだけで心を豊かにしてくれる。

確かにコンビニ弁当とかも今は充分に美味しいけれど、レンジの暖かさと手料理の暖かさは随分違うのだから、そこらへんわかって欲しい！

「き、気をつけます」

しょんぼりと項垂れる瑞貴がおかしくて、少しだけ笑ってしまった。

まあ、疲れてると料理とか家のことをしたくなくなるのはよくわかる。

仕送りがあるとはいえ、理由はわからないけど、バイトをずっと続けてるみたいだし。疲れるよね。
「さ、たべよつか」

配膳を終え、瑞貴の向かい側に座るわたし。

最近をよくご飯を作って一緒に食べる事も多いから、この部屋に食器や座布団と言った物を買い揃えてある。

「そうだな。しつかし、燈佳も随分とこの部屋で飯食うこと増えたよなあ」

「そうだねえ……」

器におでんを取り分けて、瑞貴に器を渡しながら、入り浸り初めてどれくらいか思い返す。

食器を買ったのは年が明けてからで、気がつけばわたしが座る所に可愛げのある座布団がおかれていたのだった。

「お、ありがと。しかし美味しい。俺のために作ってくれた飯というのはやっぱり美味しい！」

「ありがと、でも今回は簡単なやつだけだね」

「それでもありがたいですよ、燈佳さん」

「そ、そう？ やっぱり毎日作ろうか？」

「流石にそれは大丈夫だ。バイトもあるしな。ちゃんと笹川さんにも作ってやらないと」

笹川さんは、わたしの下宿先に住んでいる人だ。下の名前を桜華という。

彼女が端を発した結果、わたしが今の女の子の姿になったのだ。そして色々あって、目の前に座って美味しそうにご飯を食べている瑞貴と付き合うようになった。まだ一年も経っていないのに、随分と昔の事のように思えてしまう。

「学校卒業するまではお世話になるもんね」

いつも、いつでも彼とは話をしているのに、話題が尽きることがない。

同じオンラインゲームをしているという事もあるし、それ以上に、何を考えて何を思っ何をしていたのか、そういう他愛のないことを知りたいし知って欲しいから、話が終わらない。

そんな幸せの時間。でも団らの時間はすぐに終わってしまった。

食事を終えて、食器を洗って。

「泊まるなら、風呂どうするよ？」

「わたしは後でいいよ」

「そ、そうか。そんじゃ、先に入るよ」

「う、うん」

落ち着きのない様子で瑞貴は台所から、居間に戻っていった。

わたしもこれからやろうとする大胆な事に、随分と心臓が早鐘を打っている。

はしたないと思われるもいい。

けれども、どうしても、もっと深い繋がりが欲しいと思ってしまった。

お互いに意識はしていると、思いたい。

わたしの独り相撲は、かなり恥ずかしい……。

だから、できるなら、今わたしのこの体を重ね合わせたいという想いが、彼と共有できたらと、思ってしまう。

かちやりかちやりと洗い物を済ませていく。

食器を洗い終え、布巾で手を拭う。

少しだけあかぎれをしている手は、クラスメイトにお母さんみたいな手だってよく言われる。

確かに言いたいことは分かる。けれども、そんなお母さんみたいな手と言われるのは少しだけ誇らしかった。わたしだって、お母さんになれる資格があるのになって思ってしまうから。

だって、男の時はそんなこと全く無かったから。

男の時は、いつもの調子で洗い物をしていても、あかぎれなんてなかったのに……。女になってもう一年経つというのに、未だに男の時との違いに驚かされるばかりだ。

余ったおでんは土鍋の蓋をしてコンロに掛けておく。台所の冷え込み具合なら、一晚火にかけて無かったぐらいじゃ、痛んだりはいしないしね。

火にかけすぎても出汁が煮詰まって辛くなっちゃうから、塩梅が大事なのである。

それから二十分くらいして、お互いに話がないまま居間のテレビを何するでもなく見る。いつもは途切れない会話が、どうしても途切れてしまう。

もしかしたら、瑞貴もやっと気付いてくれたのかなって思うと、それはそれでわたしだって随分と気持ちが高揚してくる。

「そ、それじゃあ、俺は風呂入ってくるから……」

「あ、う、うん。いってらっしゃい」

風呂場からびちゃびちゃと浴槽からお湯の溢れる音が聞こえてくると、瑞貴がそそくさと居間から出て行く。

意外と薄い廊下と脱衣所を隔てた扉からはベルトを外す音や、衣服の衣擦れの音が聞こえてくる。

流石に本人が安アパートなんて言っているくらいだし、生活音は聞こえてきちゃうか……。

ということは、これから先の事を考えると余り声はあげられない……？

うわあ、どうしよう……。

声抑える自信ないよ……。

悶々としていっていると、いつの間にか五分ほど経っていた。時間を確認して、行動するには頃合いだろうと決めつける。

居間から抜け出して、足音を殺してお風呂場へ。

扉に耳を当てるとシャワーの音が聞こえてくる。

どうやら、これは明らかにチャンスらしい。

お風呂場の間取りは、以前掃除をしに来たときに把握している。

体を洗っていると、基本的に背中側にお風呂場の入り口があるようになるケア用品の配置をしている。

鏡もないし、これはもうチャンスとしか言えない。

一度居間に戻って、着替えと髪留めを持って、またお風呂場に戻る。

そろりと脱衣所の扉を開けて、手早く服を脱いでしまう。どうせすることすれば裸は見られるし、なんなら既に一度は見られている。

でも、かなり恥ずかしい……。

まだ冬の気配が残っている外気に晒された肩は寒さに震え、ブラを外して締め付けのなくなった胸はその寒さで、すぐさま乳首が勃起してきた。

——もう、これじゃあわたしが期待しているみたいじゃない……。

ぷつぷつと膨れた自分の乳首を見下ろして、苦笑が漏れる。寒さへの生理的な反応だというのに、これからすることと相まって、性的興奮を覚えているみたいだ。

脱いだ服をどこに置こうかと少し悩んで、結局瑞貴が脱ぎ散らかした服の側に纏めて置くことにした。

スカートを下ろして、ショーツを脱いで、ソックスも脱ぐ。

うわあああ……、余所の家で裸になってる……。

たったそれだけのことなのに、外気に晒された下腹部がとくと疼く。まだ触ってすらいらないのに、期待で甘く疼いている……。

瑞貴はまだ、わたしに気付いていない……。

それがたまらなく背徳感を煽ってくる。

どうしよう、と。

ここまできて、意気地が萎んでいく。

恐いなって。

でも、いまのわたしの中の天使も悪魔も、理性も本能も、瑞貴とエッチがしたいと囁いている。萎えなかった本能を、理性で押し込めて、意を決してお風呂場の扉を開ける。

シャワーの音がざあざあど鳴り響く室内。

それでもお風呂場の扉の音は、シャワーの音なんかよりも、大きくガチャリと響く。頭を洗っていた瑞貴が、振り返る。

「な、な、ななな、なんで!？」

瑞貴が慌てて、真正面を向き直る。

いつもそうだ。口じやあ下ネタをバンバン言っているのに、いざって言うときはこうやってへたれる。わたしは何をされても、どんな要求も受け入れるつもりなのに。

むうっと頬を膨らませて、わたしはずんずんと瑞貴との距離を縮め、裸の瑞貴に抱きついた。

「ねえ……、ボクが泊まるって、こういうことだよ……?」

ずっと無理していた、一人称を元に戻してまで、耳元で囁きかける。

「ちよ、あ、あた、あたって……」

月並みだけれども、当たっているんじゃないかと、当たっているんです。

全く、どうしてここまでへたれてくれるんだろうか……。シヨックだなあ。

「瑞貴から触って欲しいなっと思っただのに、触ってくれないから……」
待ちきれなくなっちゃったんだよ……。

「ねえ……しよう……？」

ボクの問いに瑞貴は首だけ何とか動かして、ボクと目を合わせようとしてくれる。

流し目がボクとぼつちり合って、瑞貴の瞳の戸惑いの色が覚悟の色に変わるのが分かった。

「いいんだな……？ 俺、初めてだよ」

「ボクだって、こっちの姿でするのは初めて、だよ？ してほしいことって、ある？」
瑞貴の喉が鳴る。

ここまで近ければ生唾を飲み込む音すらも容易に耳に届いてくる。

「そ、そっちこそ、したいことあるのか……？」

質問を質問で返された。

でも、言いようによつてはボクの好きなようにさせてもらえるのかな。

「したいことなんて、一杯ありすぎて絞りきれない位にあるよ」

ボクの素直な胸の内を吐露する。

瑞貴の体に触りたいしボクの体も触って欲しい。

それが一番だし、瑞貴がしたいエッチなことは全部叶えてあげたいと、常々そう思っている。例えそれがどんな変態的な願いでも、できる範囲ならやってあげたい。

「一杯……つい去年まではエロネタの一つにも興味示さなかったのに……」

「それだけ、色々興味が出てきてるんだよ。ね、顔、逸らさないでこっち見て」

「いいの、か？」

「うん」

小さく頷いて体を離して浴室の床に膝立ちをして、ボクは自分の体を惜しげも無く晒し出す。

隠す物なんて何もなく、胸はおろか同年代にしては薄いアンダーヘアも全然隠れてくれない秘所すらも瑞貴には見えているだろう。

緊張でつんと勃った乳首が嫌でも自己主張しているし、もう本当に自分でも自分が何をしているのかよく分かっていない。

「どう……？」

「お、おう……」

まだ顔だけしかこつちを見ていない瑞貴だけれど、視線が上から下まで舐め回すように見ている。

もうそれだけで、お腹の奥底が甘く疼いてくるのが分かる。見るだけじゃ無くて、触って欲しい。そう思ってしまう。

「鼻の下伸びてる……」

でも、照れ隠しでそんな憎まれ口を叩いてしまった。言つてすぐに後悔する……。

「う、うるせえ……」

「えっち。でも、ごめんね。おっぱい大きくなって。少しは大きくなったけど、一年くらいじゃ巨乳にはなれなかった！」

なんとも言えないボクの告白に自分の頬が燃え盛るように熱い。冬場だというのに額にじんわりと汗が浮かんできているのが分かる位だ。

いや、なんで今のタイミングでこんなこといつちやったんだろう……。

瑞貴の部屋にあるえっちな本にロリ系のがないのが不満なんだけれども。そりゃあ、男の子だし大きいおっぱいが好きだとは思うけれど。

実際触ると大きい方が触ってて気持ちがいいし。

「お、俺は別に今の燈佳も好きだ」

顔だけじゃなくて、体全体でこっちを振り返って瑞貴は真摯な態度でそんなことを言う。慰めとか憐憫とかそういう気持ちは一切無いのは、今の瑞貴の姿を見ればよくわかる。

ボクが自分の体を隠そうとしないように、瑞貴も自分の体を隠していない。

だから、否が応でも鎌首をもたげ始めている男のそれが目に入ってくる。

「おっきくなってきたる……」

「う、うるせ……好きな女の裸見たら男なら誰だってこうなるわ！」

「うん、そうだね」

顔を赤くして、そっぽを向く瑞貴だったけれど、それでも一度大きくなり始めたペニスは徐々に徐々に大きくなって、いつのまにやら完全に勃起していた。

その大きさは、ボクが男だった時の物よりも一回りも二回りも大きくて、本当にこんな大きさのペニスがボクに入るのだろうかと思ってしまう。

それとともに、期待で胸が高鳴り、下腹部が……子宮がきゅんと甘く疼いてくる。

でもこのままじゃあ、絶対先に進めないと思ってしまう。ボクが攻めないで。

少しでも近くで大きくなった瑞貴のペニスが見たくて、四つん這いになってにじり寄る。

「ちよっ！ 恥じらいとか無いのか！」

「だって、恥ずかしいところなんて、もう見られ尽くしちゃったし。体見られるのは瑞貴には見て欲しいくらい、だよ」

瑞貴にはもう恥ずかしいところなんて本当に見られ尽くしている。

この姿になって目の前で吐いたこともあるし、まだ付き合う前に裸も見られてる。

それに、何と言ったって、おしっこを漏らしてしまったのすらも見られているのだから。

正直、今更だ。

「この格好だと、ボクだって少しはおっぱいあるようにみえるでしょ」

視線が、一步にじり寄る度にささやかに揺れるボクの小さなおっぱいに行っているのは分かっている。それに、揺れる度にペニスがびくびくって小さく震えているのを見るとボクの体に反応してくれているのがありありと分かってしまう。

「あ、ああ……」

手を思い切り伸ばさなくても触れあえる距離まで詰めて、ボクは体を起こす。

視線が胸から下腹部に移動したのがわかる。

気付いているけれど気付かないふりをして、ボクはバスチェアに腰掛ける瑞貴の膝の上に乗った。

「ちょ……!」

「重い、かな?」

紙一重の隙間もないほどに、ボクの胸と瑞貴の胸を密着させて問いかける。

「いや、そんなことはないけど……」

「そっか、それならよかった。重いつて言われたらダイエツト頑張らないと」

「これ以上痩せてどうするんだよ」

「さすがにこれ以上痩せるつもりはないよ。肋浮いちやうし」

未だに顔を合わせてくれないけれど、勃起したペニスが言葉に応えるようにピクピクとボクの下腹部に当たっている。もうそれだけで、瑞貴がボクに興奮してくれているのだと思えて嬉しくて仕方が無い。

「凄いね……これ全部入るのかな……」

そそり立った瑞貴のペニスの先っぽがボクのヘソの下を執拗にとんとんと叩いてくる。

多分興奮して自分の意思じゃペニスの拍動をとめられないのになって思うと、愛おしさがこみ上げてくる。このままお腹で擦ったらでちやうのかな……。でもそれはちよつと勿体ない。

一番最初の濃いのはゴム越しでもいいから膣内にだしてほしいし……。

「わからん……、あんまり刺激はやめてくれ……」

「えー……」

情けない声をあげる瑞貴に、抗議の声で返す。

「燈佳も元々は男だったんだから、この状況ならどうなるかわかるだろ!？」

「ボク夢精以外で射精したことないよ……？ セックスした時も全部、な、か、だ、し、したし」

余りにも触ってくれないから、ボクは悪戯心もこめて瑞貴の耳元でことさら男の時のセックスでは膣内で射精したことを強調して囁く。

そうすると、瑞貴の亀頭がはち切れんばかりに膨張して、ボクの下腹部……子宮のあるところをぎゅうぎゅうに押し返してくる。

「あん……想像したの……？」

「う、うるせ……」

「瑞貴はボクにしたいことと欲しいことないの……？」

「ある、けど……」

シャワーのざあざあという音にかき消されるくらいにか細い声で、あると吐き捨てた瑞貴の言葉がもうそれだけで嬉しくて、ぎゅうっと抱きつく。

お互いのお腹で瑞貴のペニスを挟んで、膨張したり縮んだりを繰り返す亀頭の感触がたまらなく気持ちいいし、瑞貴のたくましい胸板に当たって、ボクの尖った乳首が自分の小さな胸の中に押し返されて行くのもとても気持ちよくて、蕩けてしまいそうになる。

「そっか、じゃあ教えて？ でも今ものすごくキスしたいから、その後でね」

そう言って、ほんの少しだけ体を離して、唇を重ねる。いつもならこの触れるだけのキスだけれども、

「ねえ、もっとえっちなやつしたいんだけど、いいかな？」

一度顔を離して、にっこりと笑みを浮かべて問いかける。

「今日なんかやけにぐいぐい来るな……」

「これでもかなり緊張してるよ！ 心臓の音めっちゃ早いもん！」

「燈佳は緊張するとテンションあがるタイプか。こう攻められっぱなしもなんか癪だし、口開けて」
言われた通りに少しだけ口を開ける。

えっちなキスを瑞貴からしてくれるのかなと言う期待と、何をされるのだろうかという不安が一瞬だけよぎった。

その不安は杞憂ですぐさま口を塞がれた。

「ん……」

少しの驚きが吐息となって鼻から漏れていく。

繋がった口と口が蕩けて混ざり合ってしまうかのような感覚を味わう。

ここから先はどうすればいいのかよく分からなくて、ボクは恐る恐る瑞貴の口の中に自分の舌を差し込んだ。

ボクの舌が瑞貴の舌に触れる。

「っ!？」

驚きからだろうか、瑞貴の背筋がピクリと震えたのが抱きしめた腕越しに伝わってくる。

それでも、すぐに受け入れてくれて、舌と舌を絡め合わせる。

お互いの粘ついた唾液が混ざり合って、口の中に溜まってはどちらかが飲み下して。

送り込まれるのが唾液だというのに、飲み下せば飲み下しただけゾクゾクと背筋が震えてくる。

お腹の奥がいいようなのしれない疼きを訴えてきて、自然と瑞貴のペニスに自分のクリトリスをこすりつけるような動きをしてしまう。

止めたいのに、止まらない……。

「んちゅ……ふはっ……キスだめ……んう……」

「自分からしたいと言ったのに、ダメって」

苦笑する瑞貴。ボクだってここまでスイッチが入るなんて思わなかった。

「違うの……裸で抱き合ってキスしたらこんなにもえっちしたくなるなんて思わなかったの……。初めてだし最初はちゃんとしたいから我慢したいのに、いま、コレを入れたらどうなんだろうって考えちゃうんだよ……」

体の間に手を滑りこませて、瑞貴のペニスの亀頭を柔らかく包み込む。

ぐちゅりと粘ついた液体が指の先に付着する。それはボクのお腹にもべったりと糸を引くようにについている所から、瑞貴だって同じ思いじゃないかと思ってしまった。

「あ、あんまり触られたら出るから止めてくれ……。自分のじゃないからって刺激の強い触り方して……」

「ご、ごめん……そのボクの方も好きだけ触っていいから、ね？」

男の時にオナニーなんてしたことなかったから、手で触ったときにどう触られたら感じるのかなんて分からない。

でも、セックスは請われてしたことがあるから、ペニスのどこを刺激すれば気持ちいいのかはなんとなく分かる。

だから、先端は触れてもいいかなって思っていたけれど、やっぱり人によって刺激を受ける場所は違うみたいだ。

「さ、さわるって……」

ボクの言葉にいちいち反応して、ペニスをひくつかせてお腹におしつけてくるのがとても愛おしくて、よく揶揄されている下半身を物と考えるとい言葉が実体験として真実味を帯びてきているような気がする。

ボクだってそうだ。きっと膣口に触れれば愛液がじつとりと染みているはずだ。

「ねえ、瑞貴のしたいことってなあに？」

ボクの体に触ることに抵抗を覚えていた瑞貴に、改めてボクにしたいことを聞かせる。準備が必要なやつはちよつと困るけれど、大抵の事なら応えられる自信はある。

「聞いて引かないでくれよ……？」

「引かないよ」

だって、ボクの方が瑞貴に引かれるような事をいっぱいしているのに、それでも瑞貴はボクの事を好きだと言ってくれている。

だからってわけじゃあないけれど、ボクだって瑞貴の期待には応えてあげたい。

「だから教えて？ 大抵の事は応えたいからさ」

耳元で囁き、瑞貴の耳たぶ触れるようなキスをして、また顔を離す。

目を合わせると、茹で蛸のように真っ赤になった瑞貴の顔が見えて、それがとてもおかしくて、小さく笑いが漏れてしまう。

「本当に言ってもいいんだな」

「うん、いいよ」

一体全体瑞貴はどういうことを望んでいるのだろうかと思えて仕方が無い。

そんなに前置きをしないといけないものなのだろうか？

「その、だな……燈佳がおしっこしているとところが見たい……」

「ふえっ!？」

「ごめんわるい。聞かなかったことにしてくれ！」

慌てて顔を背ける瑞貴だけれども、別にそれ自体はなんの問題は無い。

でもどうして、ボクのおしっこしているところなのだろうと思ってしまう。

「えっと……なんで？」

「いや、その……あれだ……夏に燈佳が漏らした時があっただろ……？」
「うん。あれ恥ずかしいから忘れて欲しいのに」

その時の事はいい思い出と悪い思い出が混在していて、思い出したいけれども思い出したくないそんな記憶だ。その日にボクは瑞貴に恋をしているとはつきり自覚して、自分で自分の事を疲れ果てるまで慰め続けた。

「あれのせいで、女子もすることするんだって思うようになったぞ……」
「ええ……」

「いや、頭では分かってたんだけど、その現実として降ってきたというか、だな」
「わからなくもないけれど……」

でも、最初のお願いがこれだなんて……。

お風呂場だし面倒はないけれど。
どうしようかと考える。

「もお、しょうがないなあ……」

恥ずかしさと勇気を合わせたような顔付きで、そんなお願いをされたら応えるしかないよね。
瑞貴の膝の上から降りて、少し距離を取る。

「瑞貴のへんたい」

振り返ってしゃがむ前にそう言い捨てる。

「好きな人の前じゃ、誰だって変態になるわ！」

「……そうだね」

全くその通りだ。

ボクだって、好きな人の前じゃなきゃ、お願いに応えたいと思わない。

瑞貴のお願いだから、おしっこする所を見せてもいいかなって思うんだから。

「ねえ、見える？」

和式のトイレに座り込むときよりも膝を外に広げて、秘所を見せつけるようにしやがみ込む。興奮してほんの少しだけ開いていた割れ目がぱっくりと開いて、お風呂場特有の湿った空気が開いた割れ目の中を撫でていく。

その感触が恥ずかしくて顔を伏せると、ボクのなだらかな胸の間から、否が応でも包皮から顔を出して勃起したクリトリスが目に入ってきた。

一人でするときよりも数段と大きく尖っているソレを目にすると、ああやっぱりボクだって興奮してるんだってすんなりと理解してしまった。

「見える」

斜に構えた視線から、見たいけれど、見ない方が、でも自分をお願いしたのだから、見なければといったような思いがくみ取れてしまう。

きつと、今のボクの姿を床ギリギリから見たら、勃起したクリトリスも、尿道口も、蜜を滴らせた膣口もばっちりと見えてしまうことだろう。

「そっか……それなら、えっちで、へんたいで、性癖拗らせた瑞貴のために頑張るね」

わざとらしく悪態を吐かないと恥ずかしくて死んでしまいそうだ。自分で排尿をすると決めたら、途端に尿意を催してくる。

シャワーのお湯が床を打つ音が呼び水になって、どんどん体の中からおしっこが出ようとしてくる。

「んっ……」

ぷしっとなんかの少しだけ、おしっこが出て止まった。体の中にある、男性よりも随分と短い尿道が緊張から排泄を拒んでいるようなそんな感じ。

恥ずかしさも合わさって、いつものようにお手洗いをするようには勢いよく出てはくれない。何度となく、ほんの少しだけ飛沫をあげて出ては止まりを繰り返して。

「んう……」

排泄の快感がようやくと押し寄せてくる。

ちよろちよろっと、秘部を濡らし始めると、すぐさまシャアアアアつと勢いをつけて、シャワーの音にも負けない音を立てて黄色の放物線を描く。

自分の想像以上に黄色く色づいていたおしっこ。

もう少しちゃんと水分を取っていれば良かったと後悔してしまう。

けれども、出した物はもう止められない。

「は、はずかし……」

思っていた以上の羞恥に顔を背けてしまう。

そして、はたと気付いてしまった。湯気に混ざって立ち上るおしっこ特有の、それも夕方に飲んだコーヒーのニオイがほんの少しだけ混ざったアンモニア臭がしていることに。

「においだけは、か、かがないで……」

余りにも酷い臭いに恥ずかしさで頬が一気に熱くなってしまう。

だけど、一度排泄したおしっこはとどまることを知らず、放物線を描いて床を汚して、流れるシャワーの水と共に排水溝へと流れていつている。

見られるのは別にいい。ボクだって頼まれたら別に見せてもいいかなって思うくらいだし。けれど、殆ど悪臭に近いおしっこのおいを嗅がれるのは流石に嫌だ。

「すげ……。女のってそう言う風にでるのか……」

勢いが弱まって、最後の水滴が尿道口から膣口を湿らせて肛門との間からぼたりと落ちる。

そんなところまでマジマジと見られてしまった。

「しゃ、シャワー浴びさせて……」

恥ずかしさと、まだ流れきっていない風呂床の上のおしっこを流してしまいたくてそう懇願する。

